
キャンディ・フェアリー

コスミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キャンディ・フェアリー

【Nコード】

N9778W

【作者名】

コスミ

【あらすじ】

僕は、初恋と虫歯に悩む11歳。キャンディ・フェアリー、君は
いったいなんだ？

1 甘い痛み・苦い出現

親指と人差し指につままれた、半透明でうす茶色のアメ。

そこに映る僕の顔は、悩ましく、険しかった。

どうしてそんな顔で悩んでいるのかと言えば、僕は、重度の虫歯だらけだから。もう、歯並びがピアノの鍵盤に見えるくらい。

そこに、こんなでっかいアメなんかが入って来たら……、刺すような歯の痛みに、鬼の形相でのたうちまわり、ずーっと悲鳴やうめき声が出ちゃうだろう。嫌な演奏だよ。

でも、それならなんでアメなんかつまんでいるのか？ まさか挑むつもりなのか？

……我ながら恐ろしいことだけど、その通りです。

理由は？ と聞かれたら、それは、このアメがすごく特別だからです。

僕の生きてきた11年の中でも1番特別だし、たぶんこれからの人生でもこのアメ以上に特別なアメは現れないと思う。

だってこれは本当に特別な、初恋だから。

「アメつくってきたの。食べてみて」

放課後、僕がいつものように勇気を出して「一緒に帰ろう」と彼女を誘おうと近づいたときだった。もう誘わなくてもさりげなく一緒に帰れるだろうけど、なんだか習慣になっているし、「いいよ」という言葉が聞けるから。

そしたら、今日はいつもと違う返事、意外すぎるセリフだった。気づくと、紙の小袋入りのアメを手に渡されている。驚きや嬉しさや疑問がごちゃごちゃして、僕は、彼女の顔とラビオリみたいにくらんだ小袋を交互に見るだけだった。

「1ヶ月遅れのホワイトデーだよ。韓国ではブラックデーだけど」と彼女が言った。

……そう、もうわかりだろう。彼女は、すこし変わっている。よどみが無くきれいな声は僕の心をくすぐり、話す内容はいつも頭を悩ませてくれる。切なくなるほどかわいその顔を見ても、心拍数上がるだけで何も情報は得られない。彼女は涼しげな表情しかないから。

「あ、ありがとう」

「いま食べてみて」

「えっ……」まさか、そうくるとは。本当に予測不能なんだから、まったくもう。

と、ちよつと喜んでる場合じゃない。

アメをなめることが僕の表情筋にどんな影響を与えるか……鬼が宿るのだ。鬼を彼女に会わせるわけにはいかない。

「いや、あの、家に帰ったら、にするよ」僕の下手なごまかし。

それでも、彼女はあっさり納得して「わかった」と言うと、すつと席を立った。

「他の人にも配ってくるから、先に帰るか、ちよつと待ってて」

「え……」

他の人にも……って、嫌な響きだ……あ、そうか、義理チョコならぬ義理アメだったのか、これ。

などと僕がしんみり立ち尽くしている間にも、彼女は男子たちに次々とアメを渡していた。だんだん、男子たちの方から集まるようになり、配る早さも増した。

エサに群がるサルどもめ！ そりゃ素敵なエサだけど！

歯ぎしりしたら鈍い痛みが、余計に顔をしかめる僕。だめだいけない、鬼は外。

「明日、感想楽しみにしてる」

彼女との別れ道。夕陽の中で彼女は言った。

一瞬、僕は身体が浮いたような気がした。記憶のハードディスクに焼き付けたい画を見つめ、僕は、鬼と闘う決心をした。

そして今、アメをつまんでいる。

キウイフルーツを半分に切ったような形。その断面だけがピカピカで、僕の顔が映っている。

ビビっているわけじゃない。アメとの別れを惜しんでいるのさ。本当だよ。

でも5枚くらい写真も撮ったし、もういただいてもいいだろう。

深呼吸。僕は勉強机に向かい、椅子の上で正座している。古い教科書の背表紙、星座の図表、ペン立て。最後に視線が止まったのは、小さなスチール缶だった。

ブラックなコーヒーの缶。これは、僕がちよっとした貯金箱として使っているものだ。それと、歯の痛みに襲われた時には、この缶を見つめるようにしている。砂糖が虫歯にしみるなら、このブラックコーヒーはきっと僕の味方だ。苦いから飲めないけど。だけど、やっぱり見つめていると効くような気がする。

そんな、お守りのような缶を見つめる、おまじない。

僕は頭の中をブラック一色に染め上げて、ふと彼女を想い桃色に変わり、頭を振ってまたブラックに。と何回か繰り返した。「よし、いくぞ。いざ勝負……」

アメの向こうに、無糖、の文字。

この世に一切の糖類はあらず！

僕は、アメをぱくりとした。

舌の上に、この世ならざる味覚が広がる。

う、お、お、おいしい……！

僕は、彼女の次に甘いモノが好きなんです。甘味バンザイ！

しかしこれは、素晴らしい味だ、ただのべっこうアメかと思っただけ、何らかの香りが絶妙に甘さと絡み合い、引き立て合い、ああ、僕を天上の花園へ誘うがとき美少女天使たちのハミングが首すじの産毛を撫でてくる。そして、飛び上がってきた地獄の猛獣が僕の頭部をガップリと噛みしめて……

「いだいっ！」

僕は目を開いた。その前は閉じていたかも知れないが、とにかく限界以上に目を見開いた。というより鬼にこじ開けられた。

「いだいだい……？」

そのとき、僕は奇跡を体感した。痛みを忘れて、黒い缶を見つめていたのだ。正確には、缶の上にいるモノを。

おまじないにしては、効きすぎだと思った。

あ、ども

缶の口に腰掛けている小さな女の子が言った。

「ぶっ！」

僕はアメを吹き出した。凄まじい速度で、缶に命中。

カーン！ コンツ、カコロン……。コインはあまり入って

なく、缶はガンマンもびつくりの飛びっぷりを見せた。

発射の反動のせいか、僕は椅子ごと後ろに倒れている。

「な、え？ うそ、……え？」

痛がる余裕もなく、僕はしばらく腰を抜かしたままへたりこんでいた。

女の子……、確かにそうだった。

ショートヘアで、すこしくせ毛だった。えりの高いブラウスのような白い服、ちっちゃな藍色のベストと紐のネクタイのような何か。飴色のハーフパンツは先細りでチェック柄。足にはくるぶし丈のブーツをはいていた。

……どうにも、精密な幻覚を見てしまったようだ。幻聴まで聞こえたし。

「あ、ども。って……」

あいさつか？ 表情もわりと平静だったし、いや、顔のつくりの良さは今関係ないよ。ちよつと気の強そうな感じで、そこがまたなとも魅力的だとか、そんなことは思っていないし、ホントどうでも良いよ。

なんだか恥ずかしくなってきた僕は、そつと立ち上がりながら机の上を視界に入れていく。

「はあ……」たぶん、安堵のため息。

そこに、女の子はいなかった。

缶がもの悲しく倒れ、へこんだお腹を僕に見せていた。ご、ごめん。

そして机の端っこでは、アメが、恐ろしいことにまだコマのように回っていた。

僕は黙ってそれをつまみあげ、キッチンへ運んだ。水ですこしだけ洗い流し、空気が入らないよう丁寧にラップで包む。

そして、冷凍庫にしまった。

ばぶん、と閉じた扉をしばらくぼーっと見ながら、僕は頭の中の嵐が過ぎ去るのを待った。

やがて、恐る恐る部屋に戻り、机の上を確かめると……。

やっぱり、何もいない。

僕はまたため息をついて、ベッドに低空ベリーロールで倒れ込んだ。

意外なことに、眠ることができた。

2 再挑戦・再出現

歯の痛みを起こされた。

もう生きるなど言われているような気がしてしまう。慣れてはいるけど。

1時間くらい眠っていたみたいだ。ゆっくりと、長いあくびをしたらすこし落ち着いた。ベッドから降りる気になった。

母さんが帰って来ていた。今日は早いほうだ。買い物してないのかな。

その通りで、夕食は有り合わせのあれこれを使った挑戦的なメニューになった。

今日は、僅差で勝ちだね、と母さんは笑った。僕もそのジャッジに賛成した。とそこに、

「冷凍庫に変なの入ってたけど」

母さんが急角度で痛いところを突いてきた。「また変な実験クッキングしたの？」 呆れた顔をされた。怒られるよりはいいけど。

そりゃ、僕だって昔はいろいろ変な実験をしたよ、ちびゼリーを何個も使って、茶碗いっぱいにしち模様のレインボー地層ゼリーを作ったこともある。でも今日のは、そもそも作者が違う。天才美少女パティシエール特製の国宝級キャンディ（義理）なんだ。

「変じゃないよ。ちゃんとしたやつだよ」 僕は正論で対抗した。

なんだか恥ずかしいけど、それ以上に誇らしかった。

「じゃあ食べなよ。ほっとくなら捨てちゃうよ」

「……はあい」でも結果はいつもと同じだった。

そんなわけで、僕はこのアメに再び挑むことになった。
天国の甘さ、地獄の痛み。

それが僕の指の間にある。

小学生には荷が重いと思います、神様さん。喜びか、恐れか、もう僕はわけもわからず色々切ないです。センチメンタルボーイです。

青春つぼくため息をつき、ひとまず倒れた缶を起こしてあげた。
ジャラっとお金の音がした。

無糖。心頭滅却すれば火もまた涼し。無心になれ！

「いざ！」

僕は禁じられた楽園へ踏み出した。地獄の責め苦が科されようと、僕は勇気と愛に死ぬ。

「ん、あまあーい……」

溶けてしまいそうだ。脳とかいろんなものが。痛みの前の甘美な一瞬は、光より早く飛び去ってしまう。それをすこしでも引き延ばそうと、僕は舌に全神経を注いでアメをくるんだ。歯にさえ触れさせなければ、しめない！ 地獄など待たせておけ！

た、助けてー……えふっ、ごほつくふん……

缶の中から悲痛なこもった声が聞こえても、地獄すらおとなしく待っているのだからちゃんと順番的に待って欲しいし、なんだか聞き覚えのある女の子ボイスな幻聴だからって僕はいま樂園満喫中なんだからホント邪魔し、な、い、でええええええって缶が揺れた！

「うぐっ」今度はアメを飲みそうになった。のどの変な場所で必死に食い止める。

ここ、から、出し……て

苦しそうな吐息が聞こえる。幻聴にしてはネガティブすぎるし、発生源が缶の中って……。

「うつつ、ごほ、けふ」僕もそれなりに苦しい。だからだろうか、シンクロしたりしてるのだろうか。

早くー……

弱々しい声だ、さらに細くなっていく。さすがになんだかわいそう。

「はあ……な、何？ 中にいるの？」

びくびくと怯えた小動物の声で僕がたずねると、缶が揺れて思わすのけぞった。

理解力！ 遅い！ えふっ、うあ……あほん、だら……

なんか怒られたし罵られた気もする。

「えー……？」なのですこし意地悪な声が出た。

早く、し、しろ

「えー？」はつきり険悪な声が出た。

ちが、今の、は、命令形じゃないよ、しぬ、から、このままだと私……しぬって、言ったの。だから、助けて、で、しぬえ

死を願われた気がする。でも、いい加減助けようか。ていうか何だこの状況。

「なんなんだ……どうすりゃいいの？」

広い意味で聞いてみた。上を向いて神様さんに。

缶きりで、開くでしょ……くほっ、愚鈍っ

なるほど。なにか難しいセキが聞こえたけど、とりあえずそれで缶は開けられるよね。いやあ、飲み物の缶を開ける発想はなかったなあ。しかしなんだよ本当に僕もう樂園か地獄に囚われちゃったりしてるんじゃない……ああ、アメあまあーい……あまあまパラダイス……。

ちよと……、早く、開けてっ……！

いよいよ死力を絞ってるっばいかすれ声になってきた。

「あ、うん、じゃ取ってくる……」

僕は口の中から意識をはなさず、歩いてキッチンから缶きりを持ってきた。

探すのに4分かかり、トイレに2分かかった。

お……っそい……！

「すぐ開けるよ」と言いながら、いざとなると缶へ伸ばす手が止まる。

「これ、なんなの？」

い、命を救う、尊い、行為……！

生命力も理性も限界な感じの声だった。言うことは正しかったから、「じゃ、やります」と僕は缶を開け始めた。すると、

「あ、だいだいだい……！」地獄の鬼がやってきた。びくつと手を引っ込める。

……

ついに缶からは、凄まじい怒気が溢れてきた。僕は、痛みと怒りの板挟みになった。

なんで僕がこんなめに……もう意味わかんない、あまいたい……。舌の力をふり絞り、アメを包みなおす。痛みは根性で我慢する。手を伸ばし、また缶を開けていく。カコ、カコ、と切りすすめ、ようやくほとんど一周した。あとは、怪我しないように起こすだけ。缶きりの刃を引っかけて、くいつと開けた。

ボケナス

ッ！

「わあ！」僕は眉間に、なにか光る弾丸を食らった。骨っぽい音が聞こえた。衝撃でめまいがして、視界が白けた。

「……くあああう」

なによりまず痛いよもう内から外から……。

僕は強く目をつむり、ちらつく星と痛みがおとなしくなるのを待った。

この、おガキさんが……、君だよ君！

不穏な呼ばれ方をして、僕は目を開けてみた。怖いものこそ見てしまうのは、なぜだろう。だけど一瞬で目をそらし、僕はうつむいた。本능が危機を察知していた。

「はい……」

私は、君から殺意を感じました。だから私も君に殺意を抱いて良いと思います。どうでしょうか？

ああ……。

聞いてるんですよ私、ごめんなわかりにくかったかな？ 答弁する機能は、君に備わっているよね？ 考えを声にしてみてもよ

「はい……、あの、でも、僕、殺意はありませんでした」

ふーん。それじゃ、悪意は？

「はい……、無い、と思います」

うん、はっきりしてないよね。それって自分にウソついてない？ もう一回考えて、正直に言いなよ。別に怒らないから

ウソだ、絶対怒る。というか怒ってる。「本当に、無いです。たまたま、色々とあれなだけで……」

歯痛のせいで、必要以上に険しい顔になってきた気がする。まずいかも……。

なんかもう、反抗的だよね君。私って殺されかけたんだけどな やっぱり捕まった。なんとか、ペースをこちらに……。

「ごめんなさい、反省してます。でも、ですね、僕も色々とわからないんです。あの、あなたって、その、何ですか？」

ここまで僕は、怒りの謎の小さな女の子を直視できていなかった。怖くて。

彼女は、立ててあるスティックのりに座って脚を組んでいる。僕はその足の先、神経質に動く靴を視界の端っこに入れていた。けど、質問と同時に思いきって全身を見た。

やっぱり、小さい。のりと同じくらいだ。でも、なんだか威圧感のせいか大きく感じる。5つくらい歳上にも見えるし。いうかも、目が、怖いよ……。逆にクールなパターンだよ……。

歯の痛みはすこし忘れていられたけど、麗しの甘味を心に染み渡らせる余裕もなく、それこそ完全に忘れていた。アメはひたすら溶けていくだけだった。

3 長い痛み・怖い妖精

色々とわかってない……ね。それはそうでしょうね。わかってやるにしても残忍すぎる仕打ちだもの

ああ、語気がますます鋭くなっておられる……。刃のそれだ。

いい？ 私はね、どれくらいの長さか知らないけど、その固い牢獄の中で、たくさんの重い円盤に埋もれていたのよ……

思い出したのか、彼女は怯えたように自身を抱いた。よほど嫌だったらしい。声も震えていた。

いきなりそこに叩き込んでくれたのも、もちろん、君だし、キャンディも吐きつばなしで私を無力化したまま閉じ込め続けて……ああ、何で、そんなひどいことするの？ 私は君に何か恨みを買うようなことした？ 何が悪かったの……？

今度は泣きそうに、すがるように言い募る。その態度は、僕の心をきめんに苦しめた。でも、なんだか誤解がありそうだし、なにより疑問が大量にあるから口を挟んでみる。

「なんかあの、僕がわからないのは、その、もっと根本的な部分についていか……」

彼女は疑わしげに眉を寄せた。困ることに、瞳はうるんでいる。喋りにくくなつた。

「あ、あなたは、何者なんですか？」

君ねえ、それ、本気で言ってるの？

急に冷めたような聞き返し。突き放された感じた。

「すみません……」なんとなく謝ってしまった。

ウソでしょ？ そこから知らないの？ 本当に？ なんでよ！？ 知らないよ。こつちが聞きたいんだって。

「僕は、いま正直わけがわかりません」

私もよ！

えー……。

彼女は、居心地悪そうにあたりを見回し（なんか恥ずかしい）、そのあと僕の顔をじっと見つめ（もっと恥ずかしい）、最後に全身でため息をついた。

それじゃあ、まずね、私のことを教えるから
なんか、ドキッとしなくてもない瞬間だった。

「あ、はい……」

私は妖精だよ

え……、う、うん、そう、まあ、そんな感じ、だよ。

「妖精……すか」

口にしたら、なんだか変な寒気がしてきた。だけど彼女は、すこし満足げにうなずいて言った。

そう、今はキャンディ・フェアリーね。ちゃんと飛べるんだからのりから飛び降りるようにして、ほら、と言う彼女は確かに、机に落ちるところか浮かんでいった。僕は呆然と、アメが音をたてて歯にぶつかるのも気づかず、目の前のイリュージョンに釘付けにされていた。

羽根もあるよ

と言いながら彼女は、僕の顔の正面で、くるっとターンした。なんだか、照れるくらいサマになっていた。

その背中に現れていた羽根は、イメージ通りのトンボみたいなやつじゃなく、プラズマ、いや、オーロラのミニチュアみたいな感じだった。形はツツジの花びらで、色は薄いイエローグリーンだった。
「わ……」

夢みたいな光景に、僕はため息混じりの声をもらした。と、痛み
のビッグウェーブに身体を折る。「うう、い……」

え、何やってんの君？

すこしだけ心配そうな声で聞いてくる妖精さん。僕は、時間をかけて顔を上げた。すると妖精さんが覗きこむように見えて、焦った。ごまかす余裕はなかった。

「虫歯……、なんです。僕」

言ってしまうと、すぐに後悔してきた。恥ずかしい。でも、お怒りをしずめるにはこのほうが早いだろうし。

なに……ムシバって？

「えっ？」

いやっ、ちょっと、怖い顔しないでよ　あなたにそれを言われるとは……。

「すみません」なんで謝っちゃうんだ僕は。「だってもう、痛いんです。すごく」

ムシバって、痛いものなの？

「はい。……あ、あの、妖精には虫歯とか無いんですか？」

と聞くと、妖精さんは強い目をして、溢れだすように早口で喋り始めた。

無いと思う。私はまだ、あまり君たちのことを知らないんだよ。

この場所のこともよくわからないし。見えたと思ったら君はなんか恍惚とした顔してたから、私はとりあえずあの忌まわしい穴の近く私もその点だけは迂闊だったと非を認めるけど　そこに座って気づいてくれるのを待って、それでようやく君と目があったら、ああ、あれは本当に怖かった……。いきなりキャンディを吹き出して、気づいたら私はあの中に閉じ込められて……

こらえきれない、というように首を振る妖精さん。ついに頭をかかえてしまった。

はああ、完全にトラウマ……

そ、そうですか……。僕も、この時間にトラウマが生まれそうです。

いや、それよりもこれ、どんな状況なの？　超絶精密な幻覚なのかな？

「あの、妖精さん」

ためらいは感じるけど、弱っているところに質問させていただく。ん？　そっぴや缶の中から出たとき、やたら元気だったのは何でだ……？

「まさか演技……、いや、そうじゃなくて、あの、妖精さんってどんな人なんですか？」

自分でもおかしい質問な気がしたけど、とにかくおおまかに聞くしかない。

妖精さんは、わりとはつきり嫌な顔をしたけど答えてくれた。

私は、キャンディ・フェアリー

「え……缶入り・フェアリー？」

違っっ！

イテッ！ 眉間に頭突きされた……。

今なんか、意味はわかんないけどバカにしたでしょ！

手で頭部をかばいながら、僕は生存本能に従い、首を横に振った。

「そんな、いいえ」

本当に……？ なーんか君っておかしいんだよね

精神攻撃に切り替えてきた……。そろそろ泣きたいよ。

君、いまキャンディなめてるでしょ？ 私のことナメてんで

しょ？ とダジャレ的に責めてきそうな予感がしたけど、さすがにそれはなさそう。僕は正直に答えた。

「はい……あ、でも、もうすぐなめ終わりますから……」と一応保険をかけておく。すると妖精さんは、目を丸くして身体を硬直させた。空中で静止すると、生き物らしさと現実味がいつぱんに無くなる。

うわ、まずい

妖精さんは、なんだか焦りだした。何か用事を思い出してくれたのかも知れない。

君、私のことがこうして見えている理由、もしかして知らない？ 詰め寄られて、今度は僕が焦る。近いのはちょっと、あれです。

「は、はい。知り、ません」

じゃあ聞いて！ 君がキャンディ と、そこでまた僕は奇跡を目の当たりにした。というよりも、危機が去ってくれた。妖精さんが突然、消えてしまったからだ。

僕は何秒間か、呼吸も忘れていたみたいだった。しばらくしてま
ず、深いため息をついた。身体中に、酸素と生きる喜びが行き渡っ
たように感じる。

ふと僕は、他のことに気をとられた。

「あ……」

あの特別なアメが、もうなくなっていた。

4 眠れぬ夜・暴かれる朝

僕は、解放感と喪失感を同時にきっちり半分づつ味わっていた。無糖のカフェオレみたいだと思った。

あの怖い妖精は、まるでそれまで存在していたことが何かの間違っていたとでもいうように、たったの一瞬で、あっけなく消えてしまった。本当に、カメラのフラッシュくらい唐突だった。

信じることも疑うこともまだできないあの不思議な会話は、光景は、だけど夢ではなかったみたいだ。

それは黒い缶が、ギザギザのフタを斜めにしてちゃんと開いていたからで、でももしかしたらまだ夢の続きなだけなのかもと、僕は今ようやく気づく。

「いたい……」

なのにほつぺたをつねるまでもなく、歯はしっかりと痛かった。けどそれは、現実である証拠とは限らない。日頃から、夢の中でも歯が痛む僕なのだ。

「いたい……」

そこでほつぺたをつねったら、なぜかしっかり痛かった。

「なんで!？」

僕は勢いよく立ち上がった。目線が高くなったけど、机の上の状況は何も変わらない。開いた缶。缶きり。スティックのり。

ピシャツと今度はほつぺたをはたく。

「いった!」

やっぱり、痛かった。

リアルな細胞の悲鳴を感じた。じんじんする。

「うそ……」

なんだか、笑えてきた。

そしてその後、口の中から去ってしまった極楽の甘露を思い起こし、僕はまた悲しい気持ちになった。国語で習っている、クモの糸

のお話、その結末を連想した。

「いや、でも、僕なんにも欲ばってないよ……」

どんよりと、被害者な気分になってきた。あの妖精さん、本当は地獄の使いだったんじゃないのかな？ インテリな鬼みたいに怖かったし。

せつかく、またとない素晴らしき初恋の味にひたっていたのに、変な邪魔のせいでほとんど痛みしか覚えてない。まったくもう。

僕はやりきれないロンリネスハートを胸に抱えて、未練がましく冷凍庫を確かめに行った。

けどやっぱり、アメはもうそこにはなかった。ついでにゴミ箱を覗いてみたら、さっき僕が捨てたラップがあっさりと見つかる。それを指で触ったり匂いを嗅いだりしていると、いよいよ夢ではないことを認めなくてはならなそうだった。

……はあ、しょうがない。彼女に味の感想を言うには問題ないし、誉めたたえる勢いのまま、もう一度作ってくださいと頼めばいい。いや、でも、痛いのはなあ……。できれば無糖で、人口甘味料だけで作ってくれないかなあ……。それを、あーんってしてくれないかなあ……。そして両想いにならないかなあ……。

ベッドに入る前。僕は、また机の上を注意深く確かめた。けどやっぱり、何ひとつ変わっているモノはなかった。開いた缶のラベルもまったく回転してないし、のりやその他の位置も変わっているとこはない。かえって不思議に思えるくらい、まったく何でもないような様子だった。

僕はそれを見ながら電気を消すと、ぐったりと横になった。

真っ暗な中で、やがて目を閉じる。眠ろうとする僕は、妖精さんの顔や仕草を思い出してしまうどころか、まぶたの裏のスクリーンに色までつけて映しだしていた。

頭が冴えているのがわかる。映写機の調子が良いから、映像もま

た鮮明だった。観客の僕は胸をおどらせ、くり返しくり返し、一晚中レイトショーを見続けてしまった。
実際の映画館では良く眠れるのに。

目覚まし時計のアラームが、なんだかいつもより嫌な音に聞こえた。怒りを込めて止める。

朝の光は、カーテンに素敵で元気な色を与えるけど、どれくらい眠れたのかもよくわからない僕には、全然ちっとも活力をくれなかった。むしろ脱力する感じだった。

「んー、あさだあー……あーもうー」

過酷な現実をつきつけられ、僕は抵抗でも服従でもない、ただ不満げな声をもらしてみた。ほとんどグチだ。

こういうときは、愛しの彼女を想えばいい。学校を休みたいとさえ真剣に考えていても、そうすればたちどころに学校へ会いに行きなくなる。今日もまた、魔法のように効果があった。さすがに、まぶたと身体の重さはいくらが残ったけど。

「いつてきまーす」と空元気な声を出すにも、脳内麻薬の力をけこう借りた。今日は体育がなくて良かったよ。

僕はちよつと頼りない足取りで、平和な住宅街の道を歩き出した。学校までは少し遠い。

昨日のいろんなことを思い出してしまうくらいに。

あの妖精さんは、なんだったのだろう。

夢だったんだと誰かに言って欲しいような、現実だったという証拠を渡してもらいたいような。不気味というか恐くもあるし、今まで感じたことのないワクワクもある。まるで僕に決めると迫ってくるみたいだった。

夢なのか、現実なのか。どっちにも転びそうだ。

ただ、記憶にはハッキリと残っていて、まだまだ薄れる気配はなかった。

眉間を指先で押すと、アザになっているのか鈍い痛みがはしる。その度にトラウマという言葉が思い浮かぶけど、あの妖精さんを完全には悪く思えなかった。

そもそも、現れた目的とか理由とか、何にもわからないのだから、判断しようがない気もする。怒るために現れたってことはないだろうし、そう信じたい。

もし、またいつか現れたら（そしてその時怒ってなかったら）、ちゃんと情報を聞き出せるようにしよう。質問をいろいろと用意しておこう。

ふと僕は、妖精さんが最後に言ったセリフを思い出し、つぶやく。「君がキャンディ……」

これで消えられたら、さすがに続きが気になるよ。もしかして僕はキャンディだとか？ 僕がキャンディ……なんだろうなあ。

と、考えながら歩いている間に、戦術上きわめて大事な道に差しかった。

正面の遠くに見える、昨日のあの別れ道が、登校時にはランデヴーな合流ポイントに変わる。

そう、僕はもちろん学校へ行くときだって、彼女と遭遇するように色々と策をこうじているんだ。人工的な偶然だよ。

毎日調査を重ね、だいたい時間は把握している。彼女は安定してチャイムの5分前くらいに教室に着く。

時間を見計らいつつ、僕はゆっくりと歩いて彼女が通るのを待つ。このタイミングが難しく、今でさえ成功率は6割くらいだ。

あ………！

そして彼女の姿を見つけたら、今度は早歩き（周りに怪しまれない程度に）。

今朝は見事、追いつき声をかけることができた。

「椎木さん……」

彼女の名前、椎木心結しいきみゆづの文字を思い浮かべるだけで、僕はだいぶ幸せになる。声に出して呼ぶと、緊張がどつと追いかけて来るけど。心結（僕の心の中ではそう呼んでます）は、今朝もあまり反応らしい反応はないけど、いつも通り短く挨拶してくれた。

「あ、おはよう」

でも、そこからがいつもと違った。珍しく連続で喋ったのだ。
「創つくくん、あのアメ、どうだった？」

まっすぐ見つめながら質問されるのも珍しいし、歩く速度が落ちるのも珍しい。よっぽど気になるのかな。そういえばアメを作ってきた昨日の時点で珍しい事態ではあったけど、まあ心結はいつも予測不能なコだし……。とうかあまり見ないでください……。

「うん、すごい美味しかった。もう、溶けそうだった」
「溶けそう？」

あ、イメージがちよつとオリジナルすぎた。「あの、美味しすぎて……ね。夢心地な感じ」

「そう……」

誉めかたが足りないのか、心結はなんだかあまり関心を示さなかった。まだ何か言いたそうだった。

僕がもつと誉めようかと思ったそのとき、また質問が飛んできた。
「味の他に、何かない？」

「えっ……」

出た、予測不能な問いだ。味の他って……。僕は、心に迫る心結の視線に耐えきれず、思ったことをすぐ口にした。

「あ、香りが良かったよ」

「そういうことじゃなくて……」

えーっ、ウソー……？　じゃあどうということなの……？

心結は「んー」と可愛くうなりながら遠くを見て、すこし悩んでいた。それを僕は不審にならない程度に横目で見える。時間なら、いつでも止まってくれて構いません。「アメなめてる時に、妖精みたいの見なかった？」

僕の時間が止まった。

「なっ……！」

足も、止まっていた。呼吸は、いま再開した。でも、何か言おうと思っても口が変に動くばかりで、声は全然出なかった。

心結もつられて立ち止まり、こっちに振り向いた。僕の反応に一瞬驚き、その後なんだか嬉しそうに手を抱き合わせる。唇を、薄く開いた。

「え、見たの……？」

僕が初めて聞く、心結の興奮した声だった。それが僕の混乱をおる。

「なに？ なにを……？」

「妖精、みたいな……」

僕は立っているのが難しく思えてきた。

「あ、う、ん……」

遅れて、変なリズムで首を縦に振った。

「本当？ ホントに？」

その声には熱があった。表情にも、本当に珍しい赤みがさしている。目がキラキラと輝いていて、僕はちょっと倒れそうだった。なんだこの事態は……。

「……だけど、ホントだけど、いや、え……？」

「そっかあ……」

心結は感慨深げに焦点をぼかし、どこでもないところを見て言った。

僕は塀に手をつく。足下がふらついて、心結から目が離せなかった。そして、その後に聞いた彼女のセリフは、過去最高に予測不能なものだった。たぶん、空前絶後。

「じゃあ、創くんって……わたしのこと好きなんだね」

僕はもう、すべて夢だと思った。

と
い
う
か
願
っ
た
。

5 妖精の謎・謎のレシピ

心結はそんな衝撃的にもほどがある発言をしておきながら、その内容に関してはまったく平然とした様子だった。

冗談か、と期待を膨らませた僕。だけど彼女の、細く長いため息には冗談らしい気配がすこしもなかった。

それでも、僕はたずねてしまう。

「え……？ それ、冗談……？」

心結は意外そうに顔を上げ、目があったと思ったらずくにそらした。照れさせないでください。

「まじめな話だよ」と、まっすぐな声で心結がつぶやいた。

ぶるつと、僕の全細胞が震えた。もうだめだ。

「なんで……」

どうして、こんなことに……。僕、何かとんでもなく悪いことしたのかな。前世で。

「そういうアメなの」 ふと柔らかい音が、僕の耳に届いた。心結が、控えめにこちらを見ていた。続けて話す。

「作ったわたしのことを、一番好きな人が、アメをなめると妖精を見るの。そういう、魔法なの」

僕は、朝日を見てみた。目を細めて、光の線が刺さってくるのをしばらく我慢した。夢は覚めない。

「それも、まじめな……？」

恐る恐るな僕の声に、心結はしっかりとうなずいて答えた。

「まじめな話だよ」

僕はブロック塀に両手をついた。そのままうつむいて泣きたかったけど、くちびるを噛んでなんとか耐えた。

もうなんにせよ、僕の心結へのファーストパッションはバレてるし、妖精は記憶の中にいるのだ。魔法を信じるとかそれ以前に、もうそれどころじゃないのもうあれです今日はもう学校休みたい、

それでもう海が見たい。海に罵声を浴びせたいよもう……もう！

「創くん……」心結のより優しい声。さすがに今の僕でも振り向く。
「とりあえず、歩こう」

「あ、うん。遅刻しちゃうよね、急ごう」僕はやたら早口に言い、夢中で心結を追い抜き前へ進んだ。学校まで会話はなくて、歩くことが難しいと生まれて初めて感じていた。

先生に会釈しながら正門を通過して、時計を見る。ほとんどいつも通りの時間だった。下駄箱に靴をしまいつつ、僕は心結の後頭部や横顔を盗み見た。けど彼女の様子に変わったところは無いし、なんだかさっきのことがウソか夢のように思えた。

と、そこで目がばつちりあって、露骨に緊張した感じでそらされた。僕も目を泳がせながら、現実、運命、という言葉を頭の中で交互に書き取りしていた。うわばきのつま先を、やたらにとんとんした。地獄へのノックにならないといいな、と思った。

つまり、フラれないといいな、と……。

授業の内容なんか入ってくるわけがなかった。授業をやっていたのかすらよくわからなかった。心結の後ろ姿を見つめる僕のライフワークも今日は楽しめなくて、でもいつもよりずっと胸がさわいでいた。たぶん、不安が加わっていたんだろう。

給食の味がなくなっていた。牛乳はただの冷たい液体で、なんだか違和感があった。歯には、ちゃんとしみた。

放課後、僕は長い時間をかけてした決意を胸に、心結の席へ向かった。なんというか、何しろもうバレているのだから近寄るのはさらに勇気があるし、半分は開き直り、砕けるつもりでもあった。

「椎木さん……」

僕はなるべく湿っぽくならないように気をつけて、だけど明るくはない声を心結にかけた。机の横から先には行けず、彼女が向いて

くるのを待つ。

「ちよつと待つて……」

すると心結は、ノートの新しいページを開いて何か書き始めた。彼女が字を書くところを近くで見るのは新鮮で、僕はその手つきに見とれていたようだ。やがて書き記された内容に気づくと、それは板書ではなくて、どうやら何かのレシピみたいだった。

第4章 察知、簡易召喚

くフェアリー・キャンディく

砂糖（白いものほど良い）…… 5

ハーブ・ウオーター…… 2

この比率で混ぜ、煮詰める。ハーブの調合は術者の好みに準じるが、以下のものは極力入れたほうが良い。蒸留法が適し、鍋の中央に器、周りにハーブと湯、フタを裏返し氷をのせ火にかけるやり方が簡便である。

スターアニス…… 1片

ヘリオトロープの花…… 1輪

プリムローズの花…… 1花弁

アルテミシア（ヨモギでも可）…… 3葉

それぞれ、表記の量を下限とし、美味を損ねない限りにおいて増すのは良い。術者の技量が問われる、研究せよ。

くつつき防止には、ハーブ・オイルを使う。元の油には、植物油、種を絞ったものが良い。カヤの実が最適であるが、現代では入手困難である為、代用として綿実油をすすめる。ハーブの調合は、ここでは自由である。ただ、術者が世話し育てたものが良い。これは上記の水でも同様である。

キャンディを整形、冷ます工程では、一晩は月明かりにあてると。精度によるが、このときに妖精がキャンディに宿る。だからといって時間を延ばすのは無礼にあたるため、禁じられている。詳しくは後章の妖精の項に記す、合わせて参照せよ。

その契約の書に、妖精の容姿を描き添える。宿っていただけのことをお願い、立位瞑想にて念じる。

効用

キャンディにより、使用者に妖精を知覚させる。その製法は上記の通りであるが、条件は他にもある。すなわち、そのキャンディを作った術者は、自身で服用しても効果はなく、術者に好意を寄せる血縁関係にない他者に与えねばならない。その他者は、術者に対し執拗とさえ言えるほどに粘性の愛情を抱く者が良い。魔術との相性が良いのである。ただし、闇に傾かぬよう注意せよ。

そして重要な点、一度に作るキャンディにより呼び寄せることができる妖精は一体のみであり、多人数に配った場合、妖精はその中で最も想いが強く粘り気のある者を選ぶ。その想いの強さに比例して、妖精自身の力も増減する為である。しかし往々にして性格の悪さに辟易し、対象者を嫌う事例が多い。妖精は大事にするべきである。

と、ちょうどノートの1ページを埋めたところで、心結の手は止まった。

途中で読むのが追い付いて、僕はペン先から生まれる文章を読んでいた。けど、“粘性の愛情”という言葉で思考は足止めを食らっていた。

僕は困惑しながら、嫌な汗が出ているのを感じた。

6 下校尋問・蘇る圧力

心結は、ステンレス製の30センチ定規を取り出した。それをノートに、書き上げたページの付け根にあてて、ためらいなく破く。まっすぐですこしければな切れ目。

書きたてで破きたてのその紙を持って、彼女は、こちらを向いた。髪を耳にかける仕草が素敵です。

「これ、魔術書にかかれてたの、写し」

「ま、魔術書……？」

思わず聞き返してしまった。予感はいっていたけど、いざ耳にするとあまりにも怪しい。なんだか、やっぱり昨日から彼女の奇想天外ぶりが加速しているようだ。ついでに僕の目とかも、いろいろ。

「親戚の家にあつたの。わたしの叔父さんの家」

心結は平然と喋り、僕は聞きながら無意識で紙を受け取っていた。ノートの紙の日常的な質感と、それとそんな言葉を耳にして、逆に怪しさが増した気がした。

「お、おじさん？」

「お母さんの弟」

欲しくはなかった説明だけど、えっと、もう……わからん。「どういうこと、なの？」

「わたしが小さい頃に一度だけ行ったことがあって、叔父さんの仕事部屋で魔術書を見つけたの。それで、そのページで目が止まって、覚えた」

「そ、そう。さすがだね、椎木さん……」

心結はめっちゃめっちゃ頭が良くて（顔の造形も含め）、ちよくちよく大学かどこかで研究対象になっている、などのウワサがたつほどだった。

それにしても恐ろしい記憶力……ああ、今朝のことだけは例外的にいつさいがっさい忘れて欲しい……。

「創くん、妖精を見たんだよね？」

心結がまっすぐこちらを向き、すこしだけ好奇心に浮かされた声を上げた。そうした些細な変化が、僕には強力に作用する。

「……えっと、どうかな」

僕は思わず周りを見回してから、さらに濁すように答えた。近くに人はいないけど、まだ教室に残っているグループがいた。

「あ、うん、外で話そう」

心結はすぐに察したらしくそう提案した。僕が目を向けると、彼女は反応も待たず帰り支度を完璧に無駄のない動作で瞬時に終わらせていた。両手を同時に、別々の動きをさせていた。

「お待たせ、行こう」

「うん……」

むしろもうすこし待ちたいくらいだった。

校庭をし字形に沿う、校舎から正門への固い道。僕は、まだここでは話さないだろうと思っていただけ、甘かった。

「どんな格好だった？」

ああ、巧みな尋問だ。周りに聞かれても問題のないように計らっておられる。

「えっとね……。まず、これくらいの大きさで……」

僕は妖精の身長を広げた指先で示すという、生涯で1度きりと思われることをした。

「うん」

心結は熱心に聞いている。感想を言いたいけど我慢しているような感じがした。

「結構おつきいんだね」

やっぱり言うことにしたらしい。

いや、大きいかどうかは知らないけど……。妖精の平均身長なんか、ねえ。

「そうだね、大きいかな」

僕は、年齢的なことを思い出しながら、そうごまかした。「年上な感じ」

「えっ、何歳くらい？」

心結ったら興味しんしんだよ。なんだか近いしすごい恥ずかしいくすぐりたい。もう、叫びながら走りだしたい。ちょうどトラックもあるし。

「あー、えっと、ね。5つくらい上な感じかな」

「5つかあ……」

あれ、落ち着いたよ。なんか失望したのかな。なんで？

「3つ歳上のイメージだったんだけどなあ……」

「えっ？」

と聞いてから僕は、紙に書かれたことを思い出した。確か、妖精の容姿を描いて、とかなんとか。もしかして、妖精さんの姿を決めたのは心結なのかも。だとしたらさすが、ナイスデザインです。ナイスラブリー！

と、心結がこっちを向いた。

「14歳なんだよ。そのつもりで描いたの」

あ、予想が当たってしまった。なんだかもう、それはそれで意外性を感じてしまう。

「そっ、なんだ……」

「創くん、今日これからアメなめてくれる？」

「えっ……」

「ひとつだけ、とっておいたの」

心結は言っで、ポケットからラビオリ小袋を取り出した。

デジャヴとは、すこし違った。

僕の脳裏に、痛みと恐怖の記憶が広がり、全身には、鳥肌が広がった。

神様さん……、僕もつと良い子になるから、どうか許してください……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9778w/>

キャンディ・フェアリー

2011年10月9日03時23分発行